

# 八代集の「そらなり」について

——形容動詞と和歌（3）

はじめに

ひめまつのお編『八代集総索引 和歌自立語篇』（一九八六年、  
大学堂書店。以下「自立語篇」を省略する）によれば、形容動詞  
「そらなり」は八代集に五十三首の使用例が見いだせる（金葉集  
三奏本を除く）。この数は、後に述べるように、若干の修正は必  
要であるにしても、古典和歌に形容動詞はあまり用いられないと  
いう傾向の中で、相当に多い数である。

「そら」は、もともとは空間を意味する名詞であり、そこから  
「漠然とした場所」「心もとない心境」など、抽象的な意味が派  
生し、さらに「そらなり」という形容動詞としての用法も派生し  
たとされる。

『角川古語大辞典』『日本国語大辞典 第二版』（以下「第二  
版」を省略する）における、「そら」の語義解説のうち、形容動  
詞に関するものは次の通りである。

○『角川古語大辞典』

よりどころがなく不安定であるさま。

① 正常な思考力や判断力を失っているさま。上の空である  
さま。

② これといった根拠のないさま。はっきりした理由のない  
さま。何となしにそう思うさま。

③ 書いたものや道具に頼らず、記憶や頭脳の動きだけに基  
づいて発表するさま。暗誦や暗算をする場合にいう。連  
用形「そらに」の形が普通。

④ 足もとがおぼつかないさま。あわてたり、忙しかったり  
して走り回るさまをいう。

○『日本国語大辞典』

比喩的に、精神状態などについて用いる。

1（形動）心が空虚であること。また、そのさま。魂が抜  
けたようで、すっかりした意識のないこと。また、その  
さま。うつろ。うわのそら。

2（形動）明確な基準・根拠・原因・理由などがないこと

謝 静

をあらわす。多く、助詞「に」を伴って、副詞的に用いる。

イ はっきりした原因や意図のないこと。また、そのさま。偶然。自然。

ロ これという理由のないこと。また、そのさま。

ハ 根拠が不確実であること。また、そのさま。

ニ 足もとがおぼつかないこと。また、そのさま。

ホ 特に、「知る」などを修飾して、とりたてて意図したり教えられたりせず、自然に推量して知ることをいう。↓そらに知る。

ヘ 助詞「に」（後には「で」を伴い、「読む」「覚える」などの語を修飾して、文字を見ることなく記憶に頼るだけであることをいう。

本研究では、辞書に記述された語義を踏まえつつ、八代集における「そらなり」の用例を概観することにする。

## 一

『八代集総索引』は、「そらなり」の項に掲出した五十三例のうち四十四例を、「そら」の項にも掲出している。これは、同書の凡例に、「懸詞は、出来る限りその二つの意味のそれぞれの項に重出させるようにつとめた。」と記された方針に基づき、掛詞（さらにそれに関わる序詞・縁語など）のレトリックに配慮した、判断・処理であることが推察される。

・ 朝な朝な立つ河霧の空にのみ浮きて思ひのある世なりけり  
（古今集・恋一・五一三・よみ人しらず・「題しらず」）  
・ 五月山こずゑを高みほととぎす鳴く音そらなる恋もする哉  
（古今集・恋二・五七九・貫之・「題しらず」）

「朝な朝な…」詠の初・二句は序詞で、自分の恋愛関係が不安定な状態にあることを、河霧が大空に立つ様子に喩えている歌である。「浮き」は掛詞的な用いられ方をされていて、「河霧」が「空に……浮きて」の意を表すとともに、「空にのみ浮きて思ひのある」というつながりで、心が不安定な状態にあることを示している。「空に」は河霧については名詞＋格助詞として機能し、歌の主意においては「上の空で」の意を表している。

「五月山…」詠は、「五月山こずゑを高みほととぎす鳴く音」が序詞で、「そらなる」は、郭公の鳴き声が「大空高く聞こえる」意を表すときには、名詞＋助動詞として機能し、歌の主意としては、形容動詞として「上の空の（恋）」の意を表している。

この二首では、「空に」「空なる」の「空」が、空間としての「空」を意味すると同時に、心や恋の不安定な状態を意味していて、掛詞のように機能していることから、歌人たちが名詞「そら」と形容動詞「そらなり」の差異を、品詞という概念ではないにしても、はっきり意識していたことが知られるのである。

初雁の我もそらなるほどなれば君も物うき旅にやあるらん  
（後撰集・離別 羈旅・一三一五・よみ人しらず・「この

たびの出で立ちなん物うくおぼゆる」と言ひければ」

この歌の「我も」は、「初雁に対して自分も」の意で、空を飛ぶ初雁を前提として自分も心が「そらなる」状態にあることを示している。「我もそらなる」の「そらなる」自体は、心の状態を示す形容動詞であるが、「我も」が暗示する初雁についての「そらなる」は、名詞＋助動詞である。『八代集総索引』が、この歌を、「そら」「そらなり」の両方に掲出しているのは、その暗示された意味を踏まえてのことであろう。

名詞「そら」と形容動詞「そらなり」の識別は、かなり困難なこともある。次の四首に用いられた「そらに」「そら」は、『八代集総索引』では「そらなり」の用例として掲出されているが、形容動詞ではないと判断するのが妥当であろう。

・ふるさとに帰ると見てや龍田姫紅葉の錦空に着すらん  
(拾遺集・雑秋・一一二九・大中臣能宣・「旅人の紅葉のもと行く方描ける屏風に」)

・春がすみたち帰るべき空ぞなき花の匂ひにこころとまりて  
(金葉集・春・三五・院御製・「宇治前太政大臣京極の家の御幸」)

・ふく風につけても問はんささがにのかよひし道は空にたゆとも  
(新古今集・恋四・一一四二・右大将道綱母・「題しらす」)

・歎くらん心を空に見てしかなたつ朝霧に身をやなさまし  
(新古今集・恋五・一四二二・女御徽子女王・「御返し」)

「ふるさとに…」詠の「空に着す」は、「空から着せる」(大系)を表している。「空に」を形容動詞として解さなくてはならない点は見られない。したがって、「空に」は名詞＋格助詞として扱うのが妥当であろう。

「春がすみ…」詠の「空」は「出発する方角や場所を表す」(新大系)名詞として解せばよく、形容動詞の語幹として扱う必要はないと判断される。

「ふく風に…」詠の「空に」は、三句「ささがに」の縁語として用いられた名詞であり、形容動詞として機能してはいないものと考えられる。

「歎くらん…」詠の「空」は、村上天皇からの贈歌に「大空」とあつたのを受けたもので、空間としての「空」を意味しており、「なんとなく・自然に」という形容動詞としての意味は汲み取れないので、やはり名詞として判断すべきである。

以下、右の四首を除いた四十九首の八代集所収歌を対象として、形容動詞「そらなり」がどのように用いられているかを概観したい。その際、レトリックとの関わりで浮かびあがる名詞「そら」の意味は捨象し、もっぱら形容動詞の側面を取り上げることとする。

「そらなり」は、人の心の状態に関する用法と、「知る」などと共起して「何となしに」(角川古語大辞典)「自然に」(日本国語大辞典)の意を表す副詞的用法とに大別される。

そこで、まず人の心の状態に関する用法を検討し、ついで副詞的用法を検討する。前者の検討にあたっては、次の順で取り上げることとする。

- 「心」が「そらになる」という表現。
- 「心」と共起する表現のうち右を除く。
- 「心」を含まないが、人の心の状態を表す表現。

二

人の心について用いられた「そらなり」の語義は、「正常な思考力や判断力を失っているさま。上の空であるさま。」（角川古語大辞典）、「心が空虚であること。また、そのさま。魂が抜けたようで、すっかりした意識のないこと。また、そのさま。うつろ。うわのそら。」（日本国語大辞典）というように説明されている。

以下、「心」が「そらになる」という表現を用いた和歌十二首について概観してみたい。十二首のうち、人事詠が十首。その内訳は恋歌六首、別歌二首、雑歌が二首。これに四季詠二首（ともに春の歌）が加わる。

- ・ 秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになる覧

（古今集・恋五・七八七・ともりのり・「題しらず」）

- ・ 時の間も心は空になる物をいかで過ぐしし昔なるらむ

（拾遺集・恋四・八五〇・藤原実方朝臣・「元輔が婿になりて朝に」）

- ・ 雲井なる人を遙に思ふには我が心さへ空にこそなれ

（拾遺集・恋四・九〇九・源経基・「遠き所に思ふ人を置き侍て」）

- ・ 君をのみ思ひやりつつ神よりも心の空になりし宵哉

（拾遺集・雑恋・二二四一・天曆御製・「神いたく鳴り侍けるあしたに、宣耀殿の女御のもとに遣はしける」）

- ・ 白雲のかかる山路をふみみてぞいとど心は空になりける

（金葉集・恋上・三六六・中納言顕隆・「題不知」）

- ・ 心のみ空になりつつ郭公人だのめなるねこそ鳴かるれ

（新古今集・恋一・一〇四七・馬内侍・「郭公の鳴きつるは聞きつやと申ける人に」）

右の六首の恋歌における「心」が「そらになる」は、心が上の空になる、心がうつろになる、の意を表している。ただし、その内実は、同じ恋歌であっても一様ではない。

「秋風は…」詠は、男に見限られた女のつらい境遇との関わりで、「人の心のそらになる」という心理を歌っている。「時の間も…」詠は、後朝の別れの後の男の「心が上の空になって、恋しくてたまらない」（新大系）思いを、「雲井なる…」詠は、「遠くに離れて居る人への思慕」で「上の空になってしまふ」思い（ともに新大系）を、それぞれ詠んでいる。「君をのみ…」詠は雷見舞いの歌で、恋しい人を「氣遣って、心が上の空になる」気持ち（新大系）を詠み、「白雲の…」詠は、相手からの手紙を見て心が「ますますうわの空になってしまった」さま（新大系）を詠じている。「心のみ…」詠は、不実な男に対する嘆きによって「気もそぞろ」（新大系）になる心情を詠んでいる。

個々の和歌は、それぞれの状況に応じた感情を表現しており、その感情が高まったあげく「魂が抜けたようで、すっかりした意識のない」（日本国語大辞典）状態になったと詠じている。「心」

が「それになる」は、一種の強調表現となっていて、そこに至る感情から連続し、融合している。

・別ゆく道の雲ゐになりゆけばとまる心もそらにこそなれ

(後撰集・離別 羈旅・二三四・よみ人しらず・「みちのくにへまかりける人に、あふぎてうじてうたゑにかかせ侍りける」)

・春霞たつあか月を見るからに心ぞ空になりぬべらなる

(拾遺集・別・三〇一・よみ人しらず・「春ものへまかりける人の、あか月に出で立ちける所にて、留まり侍ける人の詠み侍ける」)

右の離別詠では、それぞれ、別れのつらさを前提として、後に残される人の「うつろな状態」になる気持ち、「悲しくて、心も上の空に」なりそうな気持ち(ともに新大系)を表現している。

・天雲のうきたること聞きしかど猶ぞ心は空になりにし

(後撰集・雑二・一一四二・女のはは・「返し」)  
・見もはてで行くと思へば散る花につけて心の空になる哉  
(拾遺集・春・六〇・よみ人しらず・「題知らず」)  
・山ざくら白雲にのみまがへばや春の心のそらになる覽

(後拾遺集・春上・一一一・源縁法師・「通宗朝臣能登守にて侍りける時、国にて歌合し侍けるによめる」)

・そらになる人の心にささがにのいかでけふまたかくてくらさ  
ん

(後拾遺集・雑二・九二六・和泉式部・「人のもとに文やる男を恨みやりて侍ける返り事にあらがひ侍ければよめる」)

「天雲の…」詠では、婿とともに地方に下った娘のことが心配で、「(心が)うつろになつた」(新大系)ことを意味し、「見もはてで…」詠では、散る花を哀惜しての虚脱状態を表現している。

「山ざくら…」詠では、遠くに咲く桜を見て、「落ち着かずうわの空になる」気持ち(新大系)を表現し、「そらになる…」詠では、男の浮気心を、「上の空に」なる心(新大系)と表現している。このように、「心」が「そらになる」という表現自体は一定の状態を表現するにしても、そこに至る心情はやはり多様である。以上のように、「心」が「そらになる」という表現は、いろいろな感情をその極限において示す側面を有している。したがって、これを単に「上の空」な気持ちと解するとすれば、抽象的で不十分な理解に終わることがあるだろう。

### 三

次に、「心がそらになる」というパターン以外で、「心」と「そらなり」をともに用いた心情表現を概観する。

・秋風のうち吹そむる夕暮はそらに心ぞわびしかりける

(後撰集・秋上・二二一・よみ人しらず・「題知らず」)  
・あらたまの年のはたちに 足らざりし 時はの山の 山寒  
み 風もさはらぬ 藤衣 二度たちし 朝霧に 心も空に

まどひ初め　みなしご草に　なりしより　……

(拾遺集・雑下・五七一・源順・「身の沈みけることを嘆きて、勘解由判官にて」)

・いつとなく心そらなるわが恋や富士の高嶺にかかる白雲

(後拾遺集・恋四・八二五・相模・「永承四年内裏歌合による」)

・春ごにこころをそらになすものは雲るにみゆるさくらなり  
けり　(詞花集・春・二五・戒秀法師・「題不知」)

・道すがら心も空にながめやるみやこの山の雲がくれぬ

(千載集・羈旅・五一三・待賢門院堀川・「百首歌めしける時、旅の歌とてよませたまうける」)

・宮ごをば心をそらにいでぬとも月みんたびに思をこせよ

(新古今集・離別歌・八九三・読人しらず・「筑紫にまかりける女に、月いだしたる扇をつかはすとて」)

・思ひやる心も空に白雲の出でたつかたを知らせやはせぬ

(新古今集・恋五・一四一四・兵部卿致平親王・「女のほかへまかるを聞きて」)

右の歌には、「心」と「そらなり」の組み合わせ方は異なるものの、すべて「心」「空なる」状態を表現している。

「秋風の…」詠は、秋の悲しみによって心が「うつろに」(新大系)なっていることを、「あらたまの…」詠は、孤児となつて孤独と不安で「心もほんやり」(新大系)していることを表現している。「いつとなく…」詠は、恋のためにいつも上の空の状態であることを示し、「春ごに…」詠は、遠くに咲く桜を見て、「心

ここにあらずの状態」(新大系)を表現している。「道すがら…」詠は、都を旅立つ人の悲しくて「心もうわの空」(新大系)の心境を、「宮ごをば…」詠は、「都を出るのが悲しくて不安で落ち着かないさま」(新大系)を、「思ひやる…」詠は、旅に出る女を思つての「気もそぞろ」(新大系)な気持ちを、それぞれ表現している。

このように、「心」と「そらなり」を組み合わせた表現が示す具体的な心情は、「心」が「そらになる」の用例で確認したのと同様に、その和歌の主題に応じて多様である。

・いかがせん山のはにだにとどまらで心の空に出づる月をば

(後拾遺集・雑一・八六九・大納言道綱母・「入道撰政物語などして、寝待の月の出づるほどに、とまりぬべきことなど言ひたらばとまらむと言ひ侍りければよみ侍りける」)

・時鳥こころも空にあくがれて夜がれがちなるみ山辺の里

(金葉集・夏部・一一一・藤原顕輔朝臣・「郭公をよめる」  
・さしてゆく山のはもみなかき曇り、心の空にさえし月かけ

(新古今集・恋四・一二六三・よみ人しらず・「返し」)

右の三首は、「心」「そらなり」に加え、「出づ」「あくがる」「消ゆ」という動詞を伴う用例である。

「いかがせん…」詠は、夫が他の女のもとに「心も上の空になつて出て行く」(新大系)ことを嘆いた歌である。「心が上の空だ」という状態と、家を出て行くことを複合させた表現である。「時鳥…」詠は、訪れてこない郭公の心を「こころも空にあくが

れて」と表現している。「分別を失い、うわの空になる意と、空に心が惹かれる意を懸け」（新大系）た表現である。この二首は、ふわふわ出て行く夫の心、空にばかりいて訪ねて来ない郭公の心をその行動とともに表現している点で、共通点がある。

「さしてゆく：」詠は、女の家を目指していたが、恋しさのあまり「心が上の空に消え」（新大系）た思いを詠じている。

#### 四

次に、「心」という語を用いてはいないが、「そらなり」によって心情を表現している例を概観する。

・朝な朝な立つ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり

（古今集・恋一・五一三・よみ人しらず・「題しらず」）

・五月山こずゑを高みほととぎす鳴くねそらなる恋もする哉

（古今集・恋二・五七九・貫之・「題しらず」）

・人を見て思ふ思ひもある物を空に恋ふるぞはかなかりける

（後撰集・恋二・六〇一・藤原忠房朝臣・「女のもとに、は

じめてつかはしける」）

・我が恋し君があたりを離れねば降る白雪も空に消ゆらん

（後撰集・恋六・一〇七二・よみ人しらず・「心ざし侍女、

宮仕へし侍ければ、逢ふこと難くて侍けるに、雪の降るに、

つかはしける」）

右の四首の恋歌のうち、「朝な朝な：」「五月山：」「人を見て

：」は、それぞれ「思ひ」「恋」「恋ふ」という語を用いていて、恋に伴う上の空の状態を表現している。「朝な朝な：」では、さらに「気持が落ち着かない、不安定である状態」（日本国語大辞典）を表す「うき」（浮き）を添えている。

「我が恋し：」詠では、「空に」について品詞の認定が揺れている。『八代集総索引』は、「そら」「そらなり」の両方に立項。

新大系、『後撰和歌集全釈』<sup>2</sup>は、形容動詞の意味合いを認めていない。けれども、和泉古典叢書が「五句に自分も消え入る思いであることを添える」と注記するように、「白雪も」の「も」は、詠者の「心が空に消える」思いを前提にしていると考えるのが妥当であろう。

そのように、前提として暗示される意味・表現において、「空に」は形容動詞として機能しているものと判断される。

・初雁の我もそらなるほどなれば君も物うき旅にやあるらん

（後撰集・離別 羈旅・一三一五・よみ人しらず・「この

たびの出で立ちなん物うくおほゆる」と言ひければ）

・あまの河そらにきえにし舟出にはわれぞまさりて今朝はかな

しき

（新古今集・離別歌・八七三・加賀左衛門・「老いたる親の、

七月七日筑紫へ下りけるに、はるかに離れぬことを思ひて、

八日あか月、をひて舟に乗る所につかはしける」）

「初雁の：」詠の「我も」は、先にも述べたように、「初雁に對して自分も」の意で、「あの空を飛んでいる初雁と同様に、私



も空中にいるような心もとない状態にあります。」(新大系)の意を表している。

「あまの河…」詠の「そらにきえ」は、『新古今集』の諸注釈では「空に聞こえ」という本文をとっている。その中で新大系は「そらにきえ」であるが、「牽牛の姿が天の川の空に消えてしまった舟出の」というように、「そらに」を形容動詞と認定してはいないようである。しかしながら、この「そらにきえ」は、下の句の「われぞまさりて今朝はかなしき」と縁語の関係にあつて、牽牛が去っていくことに詠者の心を重ねて、「心が空にきえる」とを響かせていると解するのが正しいであろう。その暗示される内容・表現において、「空に」は形容動詞として機能しているものと判断される。

・ 天つ星道も宿も有ながら空に浮きてもおもほゆる哉

(拾遺集・雑上・四七九・贈太政大臣・「流され侍ける道にて詠み侍ける」)

・ かきくもれしぐるとならば神無月けしきそらなる人やとまる  
と

(後拾遺集・雑二・九三八・馬内侍・「十月許にまうできた  
りける人の、しぐれのし侍りければ、たたずみ侍りけるに」)  
・ 恋ひつつや妹がうつらんからころもきぬたの音のそらになる  
まで

(千載集・秋下・三三九・大納言公実・「堀川院御時、百首  
歌たてまつりける時、擣衣の心をよみ侍ける」)

・ 神無月しぐるころもいかなれやそらにすぎにし秋の宮人

(新古今集・哀傷歌・八〇四・相模・「枇杷皇太后宮かくれ  
てのち、十月許、かの家の人々の中に、たれともなくてき  
しをかせける」)

「天つ空…」詠は、流罪の道中の悲しみを詠んだ歌で、「空に  
浮きて」は不安定で上の空の心境を詠んでいる。「かきくもれ…」  
詠は、「帰ろうとする恋人を遠まわしな言い方で引き留める女の  
歌」(新大系)で、「けしきそらなる」は帰ろうとしている男の、  
上の空な思いを意味している。「恋ひつつや…」詠は、衣を打つ  
女の心境を「心が虚しくうわの空」(新大系)なものと推測した  
作。「神無月…」詠は、宮の死の「悲しみで心もうわの空になっ  
て」いる心を詠んでいる。ここでも、「そらに」自体は「上の空」  
という意味を表しているが、その具体的な心情はさまざまである。

## 五

次に、副詞的用法として、「空に知る」の用例十二首、ならび  
に「空に見ゆ」の用例二首を概観する。

この用法は、「これといった根拠のないさま。はっきりした理  
由のないさま。何となしにそう思うさま。」(角川古語大辞典)、「特  
に、「知る」などを修飾して、とりたてて意図したり教えられた  
りせず、自然に推量して知ることをいう。」(日本国語大辞典)と  
辞書に記述される用法である。

・ 君を思ふ心長さは秋の夜にいづれまさるとそらに知らなん



・ 怨むとも恋ふともいかが雲井より遙けき人をそらに知るべき  
(後撰集・恋六・九九八・よみ人しらず・「返し」)

右の二首は、ともに恋歌で、「そらに」はそれぞれ「何もなくても」「あて推量で」(ともに新大系)の意を表している。

離れている相手の思いは、直接的な根拠に基づいて知ることではできないので、「そらに」が用いられている。ただし、「そらに：知る」という表現は、「不確かに知る・いい加減に知る」ということを意味しないことには注意したい。

・ 霞さへたなびく野辺の松なれば空にぞ君が千代は知らるる

(後拾遺集・賀・四二八・源兼澄・「東三条院冊賀し侍りけるに、屏風に子日して男女、車よりおりて小松引く所をよめる」)

・ くもりなき鏡の山の月をみてあきらけき代をそらにしる哉

(新古今集・賀歌・七五一・宮内卿永範・「久寿二年大嘗会悠紀屏風に、近江国鏡山をよめる」)

・ 白雲にまがふ桜のこずゑにて千年の春をそらにしるかな

(金葉集・春・四〇・待賢門院中納言・「新院御方にて花契週年といへることをよめる」)

・ さきほふ花のけしきを見るからに神の心ぞそらにしらるる  
(新古今集・神祇歌・一九〇六・白河院御歌・「熊野へ詣で給ひける時、道に花の盛りなりけるを御覧じて」)

右の四首は、穏やかで美しい情景から「君が千代」「あきらけき代」「千年の春」「神の心」が「そらに知られる」という、共通の発想のもとに詠まれている。ここで「知る」とは、いい加減に知ることではなく、真実をその通りに知ることではない。知ればならない。「そらに」は特定の根拠がないことを意味するだけで、「知る」はあくまでも確かな認識を意味している。

・ 我が祈る事は一つぞ天河空にしりても違へざらなむ

(拾遺集・秋・一五四・よみ人しらず・「題しらず」)

(拾遺集・雑秋・一〇八二・源順・「屏風に、七月七日」)

この二首は、七夕に祈願する心を詠んだ歌であるが、次のように、「空に知る」について異なる解釈が行われている。

○ 「我が祈る：」詠について

\* 空に 天空にと上の空にと両意を掛ける。(新大系)

\* 空にしりても 「天上で知って」と、「うわのそらで聞いて」の意をかける。(和泉古典叢書)

○ 「たなばたは…」詠について

\* 空に知る 暗に理解する。(新大系)

\* 空にしるらん 天空にあつて、(見なくても、地上の人の心)判っているだろう。(和泉古典叢書)

けれども、「我が祈る…」詠の「空にしりても」の「も」は、「形  
容詞の連用形・副詞・数詞・接続助詞「て」などを受け、また複  
合動詞の中間に介入して詠嘆的強調を表わす。」（日本国語大辞  
典）用法であり、「そらにしりて違へざらなむ」（＝自ずから知っ  
てたがえないでほしい）という行為全体を強調したものと考える  
のが妥当であるから、二首の「そらに」はともに「暗に・自ずか  
ら」の意を表しており、前者の「空に」から「上の空に」という  
ニュアンスを読み取るべきではない。

・ながむらむ明石の浦のけしきにて都の月は空に知らなん

（後拾遺集・羈旅・五二四・絵式部・「返し」）

・白河の流れをたのむころをば誰かはそらにくみてしるべき  
（詞花集・雑下・三七七・大納言成通・「新院位におはしま  
しし時、上のをのこどもを召して、述懐の歌よませさせ給  
けるに、白河院の御ことを忘るる時なくおぼえ侍れば」）  
・さえわたる夜半のけしきにみ山べの雪のふかさをそらに知る  
かな

（千載集・冬歌・四四七・藤原季通朝臣・「百首歌中に、

雪の歌とてよませたまうける」）

・山里の柴をりをりに立つ煙人まれなりと空にしるかな

（千載集・雑歌中・一〇九二・二条太皇太后宮肥後・「堀河

院御時百首歌たてまつりける時、山家の心をよめる」）

・恨みけるけしきや空に見えつらん姨捨山を照す月かけ

（千載集・釈教歌・一二四四・藤原敦仲・「勸持品をよめる」

・たちいらで雲まをわけし月かけは待たぬけしきやそらに見え

けん（新古今集・釈教歌・一九七六・西行法師・「返し」）

これらの「空に知る」「空に見ゆ」も、これまでの歌と同様に、  
直接確かめようがないながらも、推し量って事実をそれと知る・  
それと見えるということを意味している。

最後に、連用形「そらに」の用例三首を検討したい。

・知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらに立つ  
らん（古今集・恋三・六七六・伊勢・「題しらず」）

・まことにやそらになき名のふりぬらん天照る神のくもりなき  
世に

（後拾遺集・雑二・九三〇・相模・「大弐資通むつまじきさ  
まになむいふと聞きてつかはしける」）

この二首では、「名が…空に立つ」という形で、事実無根の噂  
が広まることを表現しており、「空に」は「根拠が不確定である  
こと。また、そのさま。」（日本国語大辞典）の意を表している。

さ夜ふけて風やふくらん花の香のにはふ心地の空にするかな

（千載集・春上・二三三・藤原道信朝臣・「題不知」）

この歌の「空に」は、「なんとなく」（新大系）の意を表してい  
る。

## おわりに

以上、八代集から形容動詞「そらなり」を用いた歌を抽出し、様々な場面での「そら」の意味用法を考察した。

人の心の状態を表す用法では、「心」が「そらになる」という形が多く用いられていて、「上の空になる」「うつろになる」という意味を表しているが、具体的な心情としては、恋しさ、切なさ、不安、つらさ、悲しみなど、さまざまな感情の結果としての「上の空」「うつろ」を表現していることが窺えた。その傾向は、「心」と「そらなり」を組み合わせた多様な用例、また「心」を用いない「そらなり」の用例にも当てはまる。

連用形「そらに」の副詞的用法としては、「そらに知る」「そらに見ゆ」の用例を中心に検討した。この場合「そらに」は「暗に」「おのずから」という意味を表すが、その「根拠がない」というニュアンスとは別に、それがかかる「知る」「見ゆ」には不確かという意味合いはなく、真実を確かに知る、真実が確かに見える、ということを表していることを示した。

## 注

(1) 八代集からの引用は、新日本古典文学大系所収本により、適宜表記を改めた。文中で同叢書に言及する際は、それぞれの歌集名を省き、「新大系」という略称を用いる。

(2) 木船重昭『後撰和歌集全釈』（一九八八年、笠間書院）。

(3) 工藤重矩『後撰和歌集』（一九九二年、和泉書院）。

(4) 「霞さへ…」詠について、新大系・『後拾遺和歌集新釈』（犬養廉・平野由紀子・いさら会著、一九九六年、笠間書院）は、「空に」を名詞＋格助詞として解するのが妥当である。『後拾遺和歌集全釈』（藤本一恵著、一九九三年、風間書房）、和泉古典叢書（川村見生著、一九九一年、和泉書院）は、形容動詞として解釈している。

（しえ じん 本学大学院博士後期課程）